

2022. 7. 10. 主日礼拝説教

聖書： マルコによる福音書 14 章 66～72 節

『否定から肯定へ』

わたしたちはいわば「否定」と「肯定」の狭間で生という生業を一にしていると言っても過言ではないでしょう。様々な事柄を否定し、同時に同じく様々な事柄を肯定せねば生きられない現実のわたしたちの姿がそこにはあります。

本日の聖書の箇所にありますように、おそらくペトロがイエスの受難との関係の中で、何らかの形でイエスを否定したことを疑う理由はありません。しかし、この物語は史実というには余りにも技巧的過ぎます。マルコはなぜこのような形式で記事を描いたのかと考えさせられます。

この記事の母体となった伝承は、まさにペトロが使徒として福音伝道に明け暮れていた頃に成立しているはずです。言葉を返せば、当事者が生きているのにどうしてこんな不名誉な発言が物語化したのでしょうか。ユダの裏切りが非難されるのならば、このペトロの行為も充分非難の対象になり得ます。背反行為だと誹られても仕方のないことだったと思うのです。

多分、この物語はペトロ自身が、正確に言うと、ペトロによって牽引された初代教会の告白であったのではないかと思うのです。思い返せば、福音書中にはペトロの失敗や勇み足の記事がたくさん残っています。おそらくはペトロという実在人物のパーソナリティーがそうさせたのでしょう。街の辻で、集会所で、随所でペトロはこの自分の失敗談を不名誉なこととしてではなく、名誉なこととして語り続けたのではなかったかと思うのです。

初代教会、そしてマルコはこのペトロの原体験に、より積極的な意味を見出し、そして与えました。14 章 27～31 節ではこのペトロの行為が既に予告されています。72 節はこの 30 節を受けているのです。つまり、72 節を頂点に据えるように絵画的に構成されているのです。

このイエスを否定するという記述は何もペトロだけに留まる問題ではありませんでした。他の弟子たちは既にどこかへ逃げ出していたわけですから似たり寄ったりの同質の問題なのです。

マルコはここで、このような人間の持つ不確かさのただ中で、唯一イエスの発する言葉の確かさを証言しようとしていました。

そして、ここではペトロの否定に関するイエスの予告の実現を語っていますが、16章7節では見捨てた弟子たちを再び受け入れるイエスの恵みの約束(14:28)が実現されようとしていることを告げています。

初代教会は、このペトロの否定の中に自分達に通底する警告と同時に大きなはげましを見出したのです。それは人の持つ不確かさを、誓いや約束で覆い隠すのではなく、不確かな存在であることの哀しさを肯定してゆくことの上にイエスの招きが在ることなのです。

71節では、ペトロは「呪いの言葉」まで発します。呪いとは「もし真実を言わないなら呪われても良い」という意味です。29節のペトロと同一人物かと疑いたくなるほどです。しかし、人の誓いとはこのように180度変わるものなのです。ペトロの自信はここで完全に打ち砕かれてしまいます。人はどこかで打ち砕かれなければならないのです。そして、そこから「そのままのあなたで良いのだよ」というイエスの側からの招きを初めて肯定する者へと変えられて行くのです。